

芭蕉翁後白集

下

911.3

バ

下



芭蕉子集下

元禄二己歲

之日に田舎や秋日こそ恋しく
春雨や蓬もの心をなす道

此節に於て茅舎の画讚

葎草の葉をさしや破れ家

塔山旅宿にて

陽火の香にありあけ

酒のこゝろに居る人の影

月夜もろくして酒のこゝろに居る人

子菴に枕蓐あり門人の其角

嵐を渡る

支那の子菴と櫛や子乃餅

山家

轉の葉ふあらしに水の揺る

苗別

船の舟乃白魚送るや人の影

位の方を人よ譲りけ風の影

ふらふら

舟の戸も位くゆゆ代を離れ家

子菴と所を舟を先か前途

三の里乃思ひ胸よおきりや

行春や多崎魚乃月をなす

室八嶋

系遊子おぼいづまに海にあり

日光山よ

あらしや多葉の葉の日光

郭のこゝろに影乃うらや

昔付き 池にこりたや夏のこゝろ

雨降らんこけ草角とてたこやう

あまもやたうけおのり 子規

言子原ふ人を枝折の交野ん

修驗光明寺にて行者也と 鮮む

夏山よ是野をぬむ 首途うを

寺岸寺の奥に佛頂和尚乃山居の

跡あり石上於少庵是處よむまひげん

木啄も菴をこやぬらす夏木立

那頂の温泉大明神乃相殿干

ハ暖まとも移しなりて雨神一乃

鮮れ給ふ

湯を踏ふちうひもたれし岩清水

殺出石をそた石の毒糸やう

やうひも惚葉のぬまひ岩所乃

色のたぬねけうさなり死す

石所音や夏うす赤く露若し

秋鴉之人の佳景よ若也

山も遠もうこま入るや交生友

能代より馬よて遠くは付乃

花のそ枝母はなをこころやけり
子をもはゆるもかゝる

岐を携ふ馬の奈むけふ郭ら

清水流る此樹も葦野の里に

ありて田に畔も踏る皮取の那吉

戸部某のこ枝板もをたをた
おしくよ

の給ひ聞え給ふをいつくの程やと

男のしをさこの物枝陰よこそ
まよひ侍り不

田一投植てまきる 樹くれ

奥妙今枝白河は多奈

早昔も我色黒き日あはれ

西より東より早昔も風の音

関守枝板も水鶏の向ふも枝を

須賀川の譯も等竊とふものな

尋ぬまつ白川乃関いふとえり

やと向ふり

凡流のよしく免やなく枝田植るこ

皮留乃傍も大きな家栗の本陰
を

そのこて世をいふ僧あり可仲とふ

世の人枝尺付ぬ花や新乃栗

古丸はくく人衣や目
ま衣を影の栗

初志 素四ツのちこし人 播きせし

志のふれ里りちをり乃石さき者さ

早苗とる、あま空かむくし志のふれ

依藤莊司く四跡の寺に義經乃

太刀安芝々、安さきて足て什物も

安も太刀安五月にさくん安懺

く安ハ安崎の道祖神もはこり安

五月安さきくあしく方つり安

安れハよ前ちり腕中り七

安嶋さきりり五月乃安り道

武隈のちり根さ土際り二木に

安れて昔安島くしあい安り

安白とるもの表隈安ち安を

途隈と餓安いり安れハ

安りり安を二木を五月こし

仙臺よ入る安極免ぬく日あり

安右衛門と云り安有安の安

安の鞋を安も

安や安の安も安の安の鞋の

安島

鳴心 舟ありにとらきき夏は海

高敏

交子や 兵しも 夏は

光事七 寶蔵うきま珠の麻

風よやれ 金枝 霜雪よ 朽ら

五月雨乃降のこして 光事

言風雨 舟ありて 夢山 中み 追筆

蚕 虱 馬 尿 衣 枕 あり

尾 急 澤 清 風 亭

涼し けり とも わり 宿し け 旅 中 あり

遠 出 あり けり やり 下 あり けり 文 の 聲

まゆ たり けり 侍 あり けり 乃 花

立石寺

閑 たり けり 岩 たり 志 あり けり 軒 あり けり

五月雨 あり けり 舟 あり けり 上 川

風の 香 あり 南 に 近 あり けり 河

新 在 風 流 亭 無 行

水 あり 奥 氷 あり けり 舟 あり けり 船

懸 の 情 あり けり 舟 あり けり 南 谷 あり

立石寺

別院の舎にて

昔 幾や愛さうなすす 南谷
まゝこゝさや 不の三日月影 ぬ黒山
清くぬぬ 湯殿にぬきと 徒らに
そのまゝの 川流れて 月北山
ぬ黒山 影うて 後 轉ら 雲に
あつらひしや 山を 出ぬの 初まきひ
酒田 影 漆 湯 庵 ぶ 玉乃 許りて
あつらひ 山也 吹 浦 け 雲 影 雲 雲
暑き日を 海に 入れり 家 出 川

を九廿三まゝしとや
海に入るる者

花と雲や一度に瓜影さうりん

石中一周忘琴風 柳進

静かな 停音や 物なき 硯箱

象 滔や 雨に 西捲り 袂ふの花

以 越也 勢を 多ぬんて 海さし

小 翹 雲と 柳なきしや 海士り 朝

花の上 漕とよ 中れし 櫻枝 志木

西好は 海乃 記念との こと

夕よ 人や 櫻子 暮るむ 花の花

越後の 女出 雲崎と 子所より

依傍の鳴と海上十八里と

初秋のうき霧暮あけに流石に

彼も高うさくハあゝあの上乃

めよ又あゝさあ

荒海也依傍よこふ天竺河

文月ヤ右日也華の夜もあま

高田醫少知川事菴よて

きれり薬園の薬 猶にわかれ花とあは

花引よやと病は海に濁陽亭

あまき女のあこ人斗ときこぬあ

あまき女も変多物語を感すは

越後の由新習とふ身が遊女

伊勢系の言はあはれ也あまき女

送りてあまき女をいふは文をいふ

あまき女も言はれしやあま

一家の遊女も夜より萩と月

加賀の園よ入

あまき女もあまき女もあまき女

あまき女もあまき女もあまき女

あまき女もあまき女もあまき女

老翁としてその先追善を候はる

墳も勅け 宗法ありき 秋の風

の、秋風よこはるる

然 坂のゆらぐわいのむ ちりり

少の菴みいさるる

法集 法皇 著

秋もくしあ 毎もむけわゆり 菘子

旅 終るるさるるてり 秋のうき

秋もや、いりりぬかえ流石も目に

足ぬ凡のきつれい 秋の風

秋もや、いりりぬかえ流石も目に

あ、秋の風 日を 幾も 秋の風

お初とふはるる

志、しき名やわ初ふく 秋の風

観水亭雨中の會

老丸け、お、ま、有、妙法、を、行人も初、し、や、雨の秋

太田の神社にて実盛、甲錦の

切あるを、見、る

む、さん、や、れ、甲、錦、下、乃、き、り、く、ま

那谷寺と、那智谷組の、二、字、を

わ、ら、ち、侍、り、し、と、そ、き、り、石、を、あ、く、は、古、松

植まゝて群勝の土地を

乃山の石より白くあまの風

山中乃温泉

山中や葉も多きあまの湯の

機矢の音をたげ

機の本乃その葉も多きあまの風

悼遠流天看法師

そは玉をねて思ふにせ法の月

夢にふにふるも

今よりやま付消人のまの

今昌寺にまの法眼のまの

あまの僧も就現をて追ふ

おぬ庭のあまの

庭掃り出ても寺はまの

歩水の移りた俗にあまの

清女納りた移りてあまの

あまのつのと書る所

あまの川や月尺の移りた

治船漢と云前記

舟のしう雨にあまの

月尺也よまのの若さ

燧の山

義仲乃寝奠の山乃丹出

金澤の北枝とよの秋人送て

比所中を去る事今既におに

物書て扇引さく余波の事

湯尾端

丹子名を包とていふやいの神

寺崇院とて

門子入と種鉄小葉のまひん

阿弥を多稲つまを待たうらん

泊船の事と種鉄の
むいれとて

桑比の明神は夜集まれば遊行

二世新上人のうら土石を背ひ泥

供さうはのせて桑訪社木のたひ

古俗今も多しと神前にておと

背ひは是を遊行の砂持り

月清の遊行のまゝ砂比上

名月や北ふり知さるるま

鏡と崎と

月つゝ鏡をまりの海の衣

後の濱も遊ふ

舞しき也須广よりる湖濱の秋

浪の間平小貝のすくく萩乃嘉

怒水お墅

龍居多木於亥子の亥拾とや

木母尊

うとれ家や丹也葉とた田と五

如行尊

獲るのうわりなき葉おつふいれ

斜嶺亭戸さひひけて西山あり

伊吹とまをたはまをたをたをた

老いれ孤山の徳あり

それ中まに月山とれおし伊吹山

穂の物くまもいおこやまをたをた長月

ふれたるれ伊吹お迂を解むと

拾乃ぬくこまわり行秋也

内宮ま大とれおちりておまをた

迂をたをたをた

たふせきたにこれ押合ぬ清迂空

宇治お中村とふ所まで

秋風や依勢お暮原お清

又云々宛よる然不付と云の
妻男の心はいし〜りあはす
中た尺くんとらあ日向の妻
髪も〜切と席は〜も〜れし
了り今更に中あす

諸皇のまひる

月さびよ 明智の妻あはれし
知足の舟堂をたつら新史を賀せ
よき家や 雀より〜戸の案
葉の露のあはれ 拾ふあはれ

遊々畫漬

枝よりあはれ日ま〜りてあはれ
晴城あはれ付子〜石あはれ上
草猪やあはれあはれに夕〜れ
と川〜と徳橋もあはれ
いつく時雨あはれあはれ
人く〜し〜あはれあはれ

巻

あはれあはれ

冬庭や月〜あはれあはれ
山中よ子あはれと遊〜

初きに兔の皮乃此代

いさ子もさくしりし玉

此代にさくしりし玉
山を回るとありし

真屏の古じや冬より

素らよき

花柄さくしりし玉
つぎわいり六佛の夜

増酒を湖水の磯と遠出

田原芦間乃磐石を

牛馬を踏むる人

後波津や田原のぬも冬龍

若くは丸居る人とちき

先服や梅とい乃冬より

自畫り潰

いらめした音やち敷の松木笠

長喃の暮れ冬より

膳所寺の庵を人く訪る

委せよ細代に水魚煮て

何よこの所走忠を

元禄三年歳

都ちつきはよ年をとりて

薦を着と誰人いふも花の事
津路山を攀るとして西行の涙を
まじふ増賀の信を思ふ

何の本乃花よししをも自じく
解りまじきけりたのあはれ
の南

二見の圖を練り傳りて

うらぬれうしお花の浦の春
墨如う家まで

暖簾新奥りおぬれ北の梅

夏日記
三十一
と
よ
か

路奇事

安否のぬれともおろし雨は花
うらむを花笠落しう持る南
陽炎や紫胡の原乃花とり
当国衣垣の在をそめくま
言乃いそ梅の料は附れんと
いひ傳へ傳れ

一里をうら花さけり跡か
州合くや馬 粉急しに候り
殺草や花のさうりと賣あり

藤也橋木子まで

土家の松 花や木ぬらき殿なり

木白無行

畠う川音やあし乃様あさ

を夜啼中の松子や稚子也

蛇とふさび吠て思ろくおのこ

木のりときけし鱈もさぬくれ

出羽圖子呂丸といふむ様まで

死也人なり

常帰らやありれを墳のまへに

苔の萎と茂るりさふおのり

瀬田乃螢見

やう赤尺や船以碇字竟車丸

石山のれくおふふ交ふ人お位

捨ら菴あり幻住庵と云清陰翠

儼然佳境いと目出に眼望に

有ん侍人ハお丹のく免考入て

先いのむ推能木もあり夏木立

幻住菴よ龍入るころ

夕景おれし つらすぬり花

日影道や葵のいぬく五月雨

膳所へ行人よ

文政、氏、前書、
四月廿七日とあり

柳乃すつり尺と来よ頼田のねく

無常迅速

やうて死ぬるゝきまゝとす蝉の

大津箕首宅

鼓子花のいしは夜待ゆる豊岡の

合歡の木は葉こころいとし

木曾墳中菴と琴所近し

鬼すつりふも焼場はさうり

木曾墳の窟子にありて鼓子

能くくさる

糸の戸を去れや穂暮に唐し

桐花木に鷄啼きる塚の内

燧の存や稲まらうけて丹を

皇田よて

痛雁乃夜寒より居て旅病れ

菘の産多小海老に中する

海老素門雲竹自の像やある

阿婆の方にあゆむけしは海老

面きよくは 積せよとよみんら道と

六十年あかりの月を 既す五十年に

ともよき牛車しと 夢の形を

是にこそは 命を度言を

こちもむけ 我もさひいし 秋のよみ

田野の道まを

村あまや 田のあ 橋乃 黒む ちや

きりくま ちま 音に 啼火 煙る 菊

木さく 頼とれ とも 人の 新

大津

三尺の山も あし 杉木の 葉々 乱

洛陽雪 おも 常 橋丸 無行

昨日を 祢も 友よ ちと ちや 水

いゆくと 人よ 言ん ども 杉 鳴 ありん

橋のやと 杉 枝 更 実 居 心 佐て

辰つぬ 橋の ころろ や 直 巨 魁

旅行

とつ 変化 雲 小 僧の 笑 杉 色

ぬるま 世を 志の じよ

おの 後 きて 子 咲く 火 桶 ち

果の毎日新う

帝皇は乃事人と風雅も海走は

のと人より所まきの海はつづふ也

好脚の玉器一々新皮は跡し

新脚の玉器一通り新皮を足す

これや世は煤をそおるぬ古盒子

木の喜乃誰人ともちせよさる

後々老の後志賀の里よりうら

付也いよ大津松中あしり智月と

子老尼のよに君てうゆりさ

くちりあつて不きうさ

如物ああすれをれしや老貨のさ

湖水晚也

比良之上雪うけり也 鷺が橋

うし 鞋も空也の履も きの肉

中し 埋火は消やうを臘月を市

京都も立出さし列々新皮に

考をちりて

人よ 家よりハセウ我を年 けん

光緒四末年

湖底の雪名菴子春をむふ村

三日口を閑と題し月曾

小文庫三筆のそし
ゆふと有

大津路の筆跡をく免を何佛

ひふら江戸へ趣く時

梅や菜やりのこの宿乃やうけ

小里を多筆途しく免の花

卓袋亭月待

月待や梅くけ行小ゆめし

精舎子也等と有

里の予等梅折のこせ 年終報

用家子あつて二句

麦急ぐにやり休、恋り猫の書

こやうき新雨やと葉乃菘子と

素言よて友人と別る

二股ふわり初りり 麻子角

珠頌々洒落巻の記ありて

四方より老吹入れり 湖乃く

春の水を梅よゆてしゆひる

一方冬別墅

後小文二同前書そ
赤の角なりゆめし
カハカと有

年くちさゆもこやも糸のぢり

尾張の人より遠座一樽木曾に獨飲

茶一錠送るこころ人にいふも

飲めと糸はよきく二升樽

赤坂の庵にて

不憚さるゝき起さぬし事如雨

山吹や筆をさすを色紙枝の形

畫讀

包中ぬ交や字は紙焙爐の白ふけ

雀子や赤蜻蛉うらまは氣持覚

伯耆裏の赤子裁
陸奥よりさるの赤子
裁り

関北夜中集をむりて讀むる

望湖水惜事

行喜をあふくの人とたゞりけ

糸もても糸ちりりや柳鳥

結島夏の夜木心子
ゆり下駄かきも有

あそびてて不意あふ夏の月

嵯峨子て

子規大休寂をも休有夜

あらし山麓の志りや凡れ

小督を女も

うまぬとわ休れ子とる人の果

諸集大休あり
河原記
大休有

此寺の子や雅き阿乃孫のよき
或寺にゆかり居て

うき系とさのいふもかんと鳥

落柿舎

諸集むうしと
去のふしと

柚の花よむく悲しく料理は間

同へけらもあり
伯船すくわし者

五月雨や色紙屋の鳥屋のあし

諸集三夏の種を
有夏

糍ゆふ片もにるさむひのぬ製

純ちし乃祐ぬし我をまじく

正成像鐵肝石心此人之情

持子平よりあうくや補の露

碎て度人持子笑あそび上

わう智を蚊のふさきも弛るん

夫山乃像に得き

此のふたはぬ織を襟もついろも

水身月をぬく病やしく暑う南

井持氏水接

世の友や洲水よりあぬ信の

こら火を赤くは螢や糸のやせ

車輪の何原ももてあふ衣乃

中次庫ニ小きき
張るうと者

拾遺ニあむし者

遊ぶ女も事此をいひて色に
男もぬ蹴りて春さし多法成
志人昔はしるも桶をうらわの弟子
いとふるおののしゆさきに
林乃くまきさし

川風や舟のまをる夕暮る
中間を馬の真に中へいかに
太まゝ家名を称し

いづくともあらふ舟やをれ
蓮のまよ目とらうよいよや西の鼻

湖仙亭

成宿を水鏡もくぬ籠へ

海刀亭納涼の白

内、信や丸のまのあおゆ子
湖や君をたしむる乃嶺

曲琴よ遊て田家とる題を直す

飯あふく嬉うちさうせ夕すま

よもやあつさうのしゆ政おの松看

録事者簡之

甜橙之類

秋瓜之類

生者銘人

毛竹之類

出都包之類

畫續

白窟之類

霧雨之類

或智識の白

と、かゝる

高のたに

粟津之

輪のた

正美亭

丹代中

右寺

名月也

於義仲菴

生

諸島音の音

春の

大

向

女

生

老時之一史

終

人

中書ヤニツ有るも瀬田の月

某と云、友とこよひ乃月の夜

中月の跡無形かかん二三子

舟を早田の浦よむ

鎖の字月さし入る深海

いよひ也海老の夜の宵は周

成さくせせりいよひの夜

曲琴有るは題夜を

乳麴の下焼立ぬ夜定る事

指も、免為か木畑や迎所

・ 赤寺を返るよ

疾北終や改をつうむ屋生門

むいしきけちぬ屋さくお積取

猪引も猪の少袖を妻ぬる乳

鷹の目も今や夢ぬき啼轉

鬼神も冥山祭もいむあゝ

柴の菴とまけといやた名るん

とも世よりけりしき物をも

はるま東山はぼる僧を尋て

・ 知行のよやせ給らりあふし

東家集子裁し小くいふる位
やとまうそ此坊のまじり引んて

桑北戸乃月やそ我や
何坊陀坊

九月のちこおろ一様を
まうさく

来りらんハ

子坊戸や日とみそくれし葉北西

尺取のあふや此分乃後の葉

田原よやとりて

指と妻坊焼も交さく菊の花

大門通とさうと

琴箱や古り坊店乃皆戸の葉

早田の何某本改醫坊見乃

まのんてとらうと葉さく酒を

りておと小なる妙葉に珠坊中子

葉さくの態は芳しくんハ

葉も来りてをさく菊の態は

同梅瀬可休亭

祖父を親も坊子忠庭也掃えん

冬秋の葉をさ

や桐まうとらう葉さく坊

治舟三葉の葉と
前書しておやしと
砂まきと有

諸島三島のまきと
とも者

忘れずしめと桐とく
新のれとらう葉のまきと
とも者

木山子流る風道

梅柳如志のふき月の名跡を

旅忘長衣

九月起ても月乃七ツの非

月の澤と聞る明照寺に旅の

心を悦して

きく海をさぐるや海をさぐるあ菜

同寺後を奉加の初書に曰作梅

密子土石老よりと深木を物

疎勝に多く侍れと

百重のさくらを庭の影菜を

首のさくら乃れりて又さくらを影菜を

美濃耕をふ野

木をさくらにさくらをさくらに

子川亭

折くは候吹をそておれおれ

柔の後大根をさくらをさくらに

所川亭

多を揺る梅に家入候初梅

熟田梅人亭塵を乃閑を

泊船に梅と前書
さくらをさくらと
さくら

範

下三

花のひらき

水仙や白き障子花もうつり

三河より白きとよはる花

二人子花先花後と名と付

花

そ花少なひ花もふし水仙花

木 同新味の家中原宿花大津つ

京に飽きと也とくしや花後居

いづれの後代と名と付と後花後

あふとて花の園とて名も花

水仙のこき花もふし花

梅枝一早咲かぬ人保美の里

風来寺小糸花籠し

花着一つ花り出し花 花子の市

木 花のしに岩咲と名と付花

鳴田の歌塚から花より

花りて名を名のし花の雨

馬のしと志しし時雨花大井川

花のしと志しし時雨花大井川

花のしと志しし時雨花大井川

陸奥の山に花あり
と名と付花のしと名

花

下

秋を越て古菴の師小の四友
門人日しにありり来りていふ
のいふこと侍る

油船日つらふ

常よりむ鳥も雲の影の如
其の事論能賣子待着よりり

小町画讚

きさやをぬるぬり七葉中葉
他化の父の追善

油の色をいへて色しに以て

旅行

煤掃を杉の本紙向のあし

素半亭忘年

高き山を崖のころふ出立

後編の事

秋

鳥乃心を去るを

元禄五申年

あしや猿の巻を海猿の西

若水

其の事

春も女一しきさるの月を梅
うらひまや梅枝うしろ菫の前
きや梅の葉を薫る梅枝先
うらへま女をなしく乃梅柳
猫の恋やむ村岡の眺月
題ししき

不曽か情をやせぬく春の字
おとろへや菫は咲あてし海苔枝

蜆子圖讚

白魚や黒き目をあく清枝細

起よしくわら女もせ人ぬる小蝶

西行上人像賛

来てよとくつるをなまかりかと思へとも
雪の降日ききふくこそあんな花の傍
日暮うらふれやもて花

阿鳥啼や五尺乃あな急な
錦倉をきて出らん初無

結集 幸むら

五月雨や菫もつらふ葉枝を
あふ新や梅を新出き窓の元
あふ新や梅を新出き窓の元

忘水之憂存の甚す
とし笑を首しとそ
陸集の憂やと有

晋の陶明をうらむ

忘形に憂深然こころを
しは

水考月や翹を
おれとも
培くくら

素也の母七十余り
せせしの秋

七月七日にふと
ぬ文さるる
菊葉七

種をりて題とま

七株の秋のよかや
足秋

をいふし
れのく
花乃
よる
氣

まくて
有
一
ま
り
秋
を
磨
く
し

この寺を庭一丈
以
然
色
蕉
が

と
白
月
の
地
を
眺
ち
り
夢
麦
の
花

名
月
や
門
は
さ
さ
し
ら
む
潮
う
ら
ら

板を杉風松
凡
情
を
割
り
住
居
を

夢
良
悠
水
の
物
数
奇
を
わ
ぬ
を
か

明月のよそ
おひよ
と
う
芭
蕉
五
か

を
植
す

芭蕉葉を
枝
に
懸
ん
庵
が
月

竹
葦
や
さ
ら
し
く
程
ま
き
の
形

と
つ
葦
や
中
の
り
あ
へ
ぬ
秋
が
家

行
秋
乃
行
多
の
も
し
や
書
を
案
牒

芭

芭

集志之重 人も年花初切雨

塩の鯛の歯とすも雲く魚の棚

又梁亭口切の日

口切子 櫻の庭をさうくし地

焼ひくまやた友 志ゆく麓の雲

深川大橋さうりさうり

初雪や掛さうりさうり 橋のさうり

同橋成乳やさうり

有るやうさうりひて 踏橋の雲

歩さうりて 花入探れむ免橋

まことに梁多えむ 住居の雲

月影乃馬 針立人寒花入

葱白く洗ひ 上さうりむさうり

駒馬さうり 音志さうり 針立地

せりさうり 雲さうり 様様さ

鈴のさうり 甲斐さうり さうり

陸奥のさうり

元禄六酉年

人さうり 又さうり 雲さうり 鏡乃さうり の梅

春の来のりといふ人かゝる
うき世のうき世

菫の花のさし味もすこし梅の花

二月五日にて是橋、利幾入

醫門を賀す

初むすに狐のそまし路うれ

肅山乃りて免て探さる画

琴の韻小

ちり花や香もれとろく琴か塵

僧寺吟鈔別

鶴の毛乃とろま衣や花か香

露沾るよて

西行乃庵もあし急の庭

森川許方鏡あ二与

推の花乃心も州よ不雪か旅

うき人か旅もさしあるの體

露沾るよて

五舟雨に雉の落葉をふり行く

川中か根木よまらふささの音

鳥すくさくささ上の競か揚

芭

下三

八月廿三日の花丸を乗る
浪銀河の舟をひいて鳥鶴
橋杭をさし一葉を折る
二星も危形をくしるふ一町の
歌を題する

高水より足も旅のや志あり
又園の歌あり
舞や登る鎖たる門の垣
おろそや是れ中わらふらん
去来をもくもり候地の記行書下

送る字を秋奥の書付く
西東あつんさ同じ秋の風
老の名り者も去りて四十雀
枝の実ぞる猿のぬきや新海
畫讚

鈴のや雁の書 州行ありし
津川のさ清を本物とす
舟よ舟さし
川よとこ新川下や舟の友
小名木澤乃洞集無行

後集

新子さびてりよやもあまお松川
いかに心も
嵐蘭を悼

あまのうらみはてせし紀業の杖
同暮よ待て

よもそ然ち口を暮の音は月
東頃老人を憫よま生れて東

入月乃あまを礼の四隅の音
露水亭よ

新中や葉の音はさる豆腐は

お町堀

き久能花咲や石庭乃石の間

危難ちまらんのをとく
山家

集乃起よる

一高もこおさぬ葉は氷り那

在陽の高を神事乃乃ふに

悠ゆるりまそ能は花いま

あまもやん菊系開村局を

場とらふこよよりあ展を向の

...の...の...の...

秋の葉と詠して

葉の善や庭よまはるる履の底

踏つたに小坊まの...やお招引

ゆり賣れ存すも...の...
講

さ葉や粉糖の...向れよ

曲水猿鶴と

埋火や燈...客乃...は海

鼈に...な...の足

高床子猿鶴と葉根を...
吟

武士のちねまのま...の形

雑草子段色きく朝乃霞丸

冬丸の儀よ...の...
吟

卯をや水仙の葉乃...
吟

牛の韻

あゝとて...の...
吟

芥焼や豚輪の田井乃卯水

瓶破る夜水氷の夜更...
吟

さ、掃き己...の...
吟

有...の...の...
吟

...の...の...
吟

分刻の底をきりやしの

元禄七年

蓬蒿を聞てや伊勢の初便
つと野に一度つとあつちう菜水
梅うよのつと日能出る山流る
来り雨や箒吹うま川 柳
ば八物子 柳のさハ教さまへう
ハ丸間空て雨降るちま可程

小文庫まらる柳
まらる文字許らる考
まらるまらる柳

拿可柳分尺ハ柳 柳ハ那
まらる柳の泥まらるる柳子うま
まらる雨や柳葉集つるまらるの編
初よ柳ぬ養るも出よ初柳
句文への文よ

うまらるる縁世の北乃山まらるる
まらる子の子川まらるる金まらるる
まらるるまらるる舟まらるる 柳 系
まらるるまらるる畫潰

まらるる袋の中乃舟まらるる

梅と花と夜 所々せぬは 花の夜
春の夢は心よ

花よ夜ぬこれもまらひら 風の葉

上野の夜はよきなりけに人く

暮らちさひまゆけ 春の心は

さかしくる侍の物語を

ゆり五箇の揃りぬ夜見ころり

権佛や能く今まゝ 珠の言

木よりて茶摘もまぐや 郭の

鳥 穢賣の言はまじく 村の鳥

志はたしえと
はなれまじく

子花やととに梅乃及こし

紫の言や 露も小庭の別生

贈紙隠新巻自画讃

花の夜 露や牡丹花の露

四度心をひらけ 深川乃庵を

ま出るとて

うらひすや 牛の子を先を

五月十日 武府を去る 趣く

川崎まで人く送る 幸て 錢の

鳥をよそけし

五月二十日

夏の初を多ふりよつてむくは

五月二十日能富士の男出づるに

月より海村やまを更己月富士

駿河海也花橋も茶飲ふか

道芝よやまうひて

少んくるとあふちや雨乃花よま

大井川水出て海田塚本氏

りくにまかりて二白

五月雨のそ吹寄せ大井川

荒をちりま葉さくくや花子け

請集未後やま

夏月傳油より出守赤坂

尾張を春交に寄

世を旅に代りく小田乃行戻

流川のやもく依成中道

送りしやまに徳士山田氏

うらま

水鶴きくと人おいへてや依成

中水岡居を思ひま

まうくま指圖に足中海住居

義濃路より李由のしへ文

志水と一やま
大塚の内近うき國

晝前に登る藤せりり床の山
志田氏の遊亭

紫付し馬の庭りや田植楳
愛芝の庭に松を植るを足て

涼しきや直し那松枝のちり
古来うお整え

新藤ふよこふてまき瓜は泥
梅出里は有きまきし初は瓜

小倉山常寂寺より

松杉をかえてや此松のむき
六月中葉に ちりくおしし山
神明亭

まきしきと松よつしり嵯峨の竹
清泚や流にちりこむ青松葉
夕刻の子葉むひる遊りり
元道に築して

花より松をニツよわねし古葉瓜
人くつとひて瓜の居所数多
心出る中に

志田氏の遊亭
香信子

香信子
志田氏の遊亭

うき物思む心も所も蓮華吃

大恒の城之日光傳代高勅

於ふ大庵従も岡田何某は遠

無の處 袴子けし 茂と靴

曲翠亭

夏夜やあはれてのしひや物

大津木篇亭

秋ちりまののぞけや水亭

紫菴亭

是細し其の中より乃夜の露

ひやくと唇をぬかす 晝寝る人

注船と先の歌

夕や秋もささむる夜はさし免

大津の侍りしを先の汗より皆

息をいれんと四里より仰て鳥

宗もこれ杖の白髪乃暮糸り

尼壽貞うすやりの侍りて

あなをぬすれん思ひそむまら

中間の馬の毫に歌首も此

笛枝をらす一多能き所を

信長公三十一
百集は板や有る
しるし一はふれ

画て家甚の壁に掛りたること

て前所越さるゝ出遊はな人や

の所弱膝を枕としてことま

うつゝをわらふはももももの前を

おけりりあり

輪つおや歌の所らすまの種

いさ書也園所方行五位は聲

麻布を言席子の庭らまらゆり

いさをらゆり

凡色や志とろよは猶し庭の森

忘りて
入るる

猪乃床も入るやまりくも

めよらあらやまけしのまらら鳥

名月の夜うと入るまららゆり

名月には簾は霧や田乃まもま

とまらら芳は月も十六里

位勢の斗は後は山は家をとららら

夢をまら花てもちまら山はゆり

物は草やまらぬの魚乃へらららつま

序地はまらまらまら

里らりら梅のあらまら家もれら

忘世本よみて新
入るよとていふ
新

猪乃床も入るやまりくも

めよりあそやまはしのまら鳥

名月の衣うと久くきよ海も

名月に篠吹霧や田乃とも

と香いん 芳野、月も十六里

位勢の斗後よ山家をとん

きまをす、花てりちま山家

物草やきぬふの葉乃へりつ

序地 聖賢書 巻五

里よりき 梅のありぬ家も

行旅下ををいりて家栗のいり

南都より

菅の香や素ふりまき古き佛座

花の香や素良き筆代の墨

いひと啼風あしし 夜に麻

園崎にて

菊の香にうらまき秋の香白小

出玉遠より思ふ

菊に出す素ふりと秋夜を曾月夜

佐吉のあまき

秋買てかぶらえは月入る

車、庸亭ニ

秋の夜をうちあきしうら

れもしうた秋の秋夜やま

周女家にて

白菊の目やまきりて

旅懐

秋を何て年とあそび

芝松行

秋の何れも人を

清涼寺の茶屋に遊ひて
あつし哉

芳乃ふふく申らるに

松風の勢を覚りて秋をいぬ

目取より泥呈る集此祝諧怪

る所所思

志水は万後行人
まじに更せしむ

道や行人有しに秋のふ

人ありて是よりあき秋

其極亭

志水は万後行人
まじに更せしむ

秋もたわよつて雪の形

畦山亭より月下に免を送る

題を置る

月もむや楓こころ家 児が供

十月十日病中吟

志水は万後行人
まじに更せしむ

猿の病と憂をいん地をいん免を

志水は万後行人
まじに更せしむ

新葉の出を免る早き村雨が

後見出さるる号しんす

花も槿はらわしる乃のさしん

人の号へ如て行く

世木喜
神の字をわらう時雨の

蝶のぬ乃 隻為 翅る 蝶のぬ

窓陽 花や 帷子 対 花 為 樹 芝

人子 帷子 を もり いて

流鳥よきをきり
登石と者

いて やや 礼す 未 存 着しり 蝶の 夢

美 憐 垂 井 花 宿 拒 ぬ ら せ じ

冬 籠 して

従り 木 花 庭 を い さ 多 言 し べ ら ぬ 事

何 某 新 八 ち ぬ 乃 二 月 十 三 日

方一十巻しり
梅丸子供

梅のよむくし 花一葉あり 花より

郭ろ 花 横し 花 水 花 けし

い 空 花 乃 花 花 横し 花 規

甘 多 中 心 々 麦 の 花 尾 糸

登 足 八 七 首 筋 赤 未 花 花 花

玉 川 花 水 花 花 花 花 花 花

花 花 花 花 花 花 花 花 花 花

歌鳥片玉上青

秋浦菊西瓜のそと 笑ふ身

あゝ黍也 新垣秋萩乃取ち

高瀬の漁火とふ題をうて

森火にうしや信秋下むせひ

梅咲きよるこふ夢の景色は

貞徳の韻

おさ八名や考しぬぬ秋丸以中

雁さくき羽秋田面や雲の雨

よふ起くや帆夜きむま入はるれ

煤おりて懐く家ふきくつと足

鐘接ぬ里多何をうきゆのそ経

曙やまゝの朝日子かやうきん

不卜そ母道傳

水向多あゝひ臨入道明寺

東武より上りて人くよあす

東海の花きよのそらうし床き

懸糸乃衣は啼ゆく蚊秋よん

木を伐りて中に見えたりふの月

河臨中物よすきれぬ蕎麦秋

浪持わつとをくふ花のつ

戸田様方支考にて

つしとん 燦や 伴る小石河
夏よりて 名月 暑きまきとん
氣録 巧まり 燕しり 序新 講
ゆき けや 翔も 有の に 考 分 別
うし せお ぬし 講し 牛 於 書

持好の讚

此 槌乃 むくく 棒の 梅於 木れ
歩る 是 案や 意 定 持て 足
むき ぬき ちや 齒に びく 象の 齒

支考 東行 餞別

中々 詠 推せよ 飛子 玉 器 一 色

寒山 自画 讚

庭 掃て 舌を けり 舌 けり 舌 けり 舌
鳩 鳩も 出よ ちき 世乃 飛よ 鳥
お 梅や 兄 ぬ 恋 傳 玉 玉 玉 玉

園の 役 素 米 於 ぬ 大 極の 松
店を 訪 入 爲の 藤 しろ ちき せ
い ちり 人 志を 宗 祇乃 むう しの
よ かし びき

藤の葉を 就諧にせん花は

路通うにちのくに趣く

音 枕おとさ花又して

亦周亭をて牛睡日

降 ともて牛植る日と

中水う旅行を送りて

見送り花うしるやさしく秋の風

畫韻

鶴 等やそ花あはる

十九日

花まに水うしる花つと

む先咲やう、花うは京た

浅きふ里うも

海 昔けのち信うは

る飽と中人う花あ

ちのうく水降は

初 秋中海も喜田の

蓮 池中折うて花う

何うして小葉う花う

名月の花うも

五ツ六ツ以て書出するの意はあらず

海軍の事や半ばの頃の集の画は

頃子の浦北年頃のや集一把

越後の新得の事

海軍の事や西や東一ききり古

五月雨の籠りつむいひの事

海軍の事や西や東一ききり古

越後の新得の事

海軍の事や西や東一ききり古

五月雨の籠りつむいひの事

歴代中に書と得る事といふ事あり

わらわら乃この句集を得る事といふ事あり

校のあやう筆も執りて行ふ事あり

なく此の道の行跡を思ひ或時を

留錫は志しむ字候も硯の海をひら

白こと乃如後より月々わらわらにそと

降やうしち人併にあきて墨つきを

とくに書つけおひりる事あり

祥子乃父之書林井筒屋在言術

其心亦如向來也但陰豐冠川此不

佳言術之

翠樹書



安永三年七月

舊門就諧書林

井筒屋在言術

壽祥

翠樹書

翠樹書

